

# COSMOS集



大野 英子選

「あすなる集」特選

春の太陽

久保雅子 北海道

歲月は人も暮しも変へてゆく孫を思へば大人になつた  
何をなす望みあらねど今はまづ春苗幾種に心かたむく  
例年になき暖かさ春苗の播種を終へたり三月十日  
春陽うけ一つ二つと発芽する楽しきかなや始まることは  
葱一番二番トマトが発芽する春の太陽あまねくうけて

水玉のコップ

多田 美慧子\*宮城

水玉のコップに替えて口漱ぐ明るき音に春は始まる  
ああきようは歩けそうだとおのずからからだは動く三月なれば  
3・11こどもが不意に帰り来て共に献花し東京に戻る  
ケキヨと鳴くことしのうぐいす上手なり憂いの多き春の慰め

喪の続く冬は過ぎゆき春彼岸らんとウカステラきみに供えん  
歌 う 渡辺 幸子\*福島

窓開けて冷たい風に目覚めたりさあこれからとスクワットする  
マニキュアを勧めてくれる人ありて米寿の指の美しさ見る  
ひな祭りの白酒いただき歌合戦美声を競い顔が若やぐ  
口数の少ない人もカラオケの声は伸び伸び小節も廻る  
難聴でイントロ聞けぬ我なれば皆の手拍子頼りに歌う

上書きの雨 荒川 ゆみ子 東京

白雪に上書きの雨ふりだして混濁してゆく山手通り  
雨に濡れた紙の袋の心地して今日は何かを容れたら壊れる  
リード引く犬があなくて公園のすずらん水仙見ごろを逃がす  
真夜中のコインランドリーの乾燥機 息子に代はつて礼を言ひます  
ではまたと片手を挙げて君いひぬ本に葉を挟むみたいに

小さき背なか 奥 呂美生 東京

さみどりにつのぐむガマに行く水が春よ春よと音きかせゆく  
あをあをとガマの芽あまた伸び立ちてカワセミはしる野川の水面  
着水の水音たかきかるがもの羽はしまはれ小さき背なか  
桜木に羽音とびかふみつばちのさざなみのやうなその音をきく  
さくらあり菜の花ありと知るものぞ咲けばとびくる蜜蜂のむれ

水上 芙季選

即席ラーメン

須磨 洋次郎 東京

お向かひは表札の無く住む人と長らく会はず苗字を忘る  
歌詠みに追はれ疲れはするものその疲れにこそ生き甲斐潜む  
四日間妻留守なるに普段には食はぬ即席ラーメン作る  
散歩して翁媪に良く出会ふ正に己もその一人なり  
毎日のテレビニュースは殺人と火災と交通事故で埋まる

路地から路地

牧 好 恵 東京

水遣りす、濯ぎ物干す、買ひ物す、小さきわれを照らす冬の陽  
はじめての路地から路地へわが行けば真つ赤なほこら、稲荷あらはる  
冬の陽が向かひの窓に反射してわが北窓は真昼の銀河  
ふつふつとおでんを煮れば立ち込めるにはひの中にかへる誰彼  
マスクなきマイナカードの顔写真真せて口紅させば良かった

ひたひた

折笠 瑞 枝\*新潟

ぶつくりと身をふくらますホタルイカ短い脚が春につやめく  
かんかんとモップの音を響かせて階段掃除のYさん近づく  
病衣着てキャベツの味噌汁飲むだけでひたひた迫る病人気分  
ドクターのふたつの目玉がまず迫り白内障の手術が始まる  
病室にふいに差し込む冬日ざし白いシートに壁にまぶしき

ワームムーン

柴野 房江 石川

ランチする北都のジブ煮のすだれ麩の食感が好き何年振りかな  
加賀料理のひとつジブ煮のすだれ麩を食べばじゅわつと父母の味  
古家の郵便受けにマンシヨンのチラシ様々縁のなき紙  
ワームムーン誰も見てない独り占め九十一も後半年か  
手入れせぬ沈丁花でも季くればわんざわんざと荅が笑ふ

ふるさと

時田 泰子\*静岡

器用なる友の造りし孫の手がほどよく背のかゆみを撫でる  
手もかけず肥料もやらず毎年をけなげに咲きしムスカリの花  
如月の風這う庭に水仙の小筆のごとき蓄ふくらむ  
日本語で「ふるさと」歌うウクライナの少女のひとみは青く澄みおり  
簡単な冷凍食品とり入れて娘のおせち色どりのよし

松尾 祥子選

青き 残像

奥村 幹 男\*愛知

ふくよかな黄色い腹のジヨウビタキそこだけ春の一月の庭  
冬枯れの土手をかすめるカワセミの青き残像目に残りたり  
如月の静かな雨にストーブの前で時間がゆつたり伸びる  
夕暮れのスタバに入ればスイングのペースのリズム店内に満つ  
午後六時弥生の街はゆつくりともものかたちがフェイドアウトす

苾 棒 高 橋 みどり\*愛 知

母校で始まり我慢の三年を過ごした子らがきよう卒業すぐずぐすと泣かないようにプリントを配りて終えん最後の授業わたくしを貫く三十八年の教職という苾棒を抜く

四月には先輩となる君たちを見られないのか、見られないんだ約東のように桜はまた開き四月の校舎にわたしはいない

王 塚 古 墳 田 中 みどり 兵 庫

新年をうからが揃ふ三日程子らは味はふこのふるさとを米粒の大小のことに気に留めず近江米研ぐ名は「水かがみ」あかね茜蜻蛉飛ぶ下山門駅に降り立てば早くも思ふ上山門かみまの地玄室の壁は彩色に囲まれて王塚古墳は密ひそと華やぐレプリカの羨道を来て立ち止まる壁の黒馬こくばが歩を拒むゆゑ

初 瀬 川 友 田 昌 子\*奈 良

こもりくの泊瀬の山の樹々芽吹く雄略天皇の若き影  
さざむ石籠もよ美籠持ち梅の香につつまれて在り白山神社  
早春のひかりをあびる初瀬川きらめきのせてくだりゆく波  
スタートはキトラ古墳よわが住める明日香路駆けるハーフマラソン  
古沼に鴨の家族があらわれて水面に描く円の重なり

専 属 シ エ フ 小 谷 優 香\*鳥 取

大学の受験結果を待つごとくコロナ結果がスマホに届く

コロナ下に料理の腕を上げし夫今は私の専属シエフなり  
「ずる休み」する孫に子は「リフレッシュ休暇」と言いて海見に誘う  
転勤のあいさつをする同僚は置き土産にと初めて顔見す  
畦道で幼がスキップするように土筆タンポポくんぐん伸びる  
原 賀 瓊 子 選

あめしずくの花 江 崎 玲 子\*福 岡

雨あがり春の陽あびて白梅の蕾きらめくあめしずくの花  
花よりも濃ゆき色香を内に秘め蒼紅梅青天に映ゆ  
山肌やまはだに新芽をいだきふふわと梢ゆらめく落葉樹の森  
浅草寺賽銭箱を前にして柏手をうつ条件反射で  
定年も年金支給も先送り強制労働省と聞こゆる

六 十 三 番 石 本 洋 子 佐 賀

病院の診察表示は数字なりけふのわが名は「六十三番」  
祝ひごとならねど不意に思ひ立ち夫と二人の赤飯を炊く  
「富士山は女性ですよ」とガイド説く然うとばかりは言へぬと仰ぐ  
強弱は歴然として餌台えさだいのヒヨドリ去ればすぐにメジロ来  
骨粗しやう症あせが突然この身に襲ひ来て「今日から薬一錠飲みます」

坂 垣 野 幸 一\*長 崎

並みよろう山が囲める町に住み休みの時は海岸歩く  
老いゆきて坂いとわねば良きところわが家は山にも海にも近し

山にきて身体動かし風にふれ鳥の声ききこころうごかす  
対向車怖れつつ越ゆる峠路に村落見えて離合はあらわ  
深山の寺の裏木戸開いていて猪捕獲する鉄籠のあり

わが時間 永松 たづ子\*大分

明日の朝売られゆくピアノ拭きあげてハノンに醒ます長き眠りを  
ほこり積むデュファイの額の残りたりピアノの去りてむきだしの壁  
美容院いつものごとく持つ本のカバーはうらにかえしてかける  
老を詠む歌に鉛筆の印あり古書なる佐藤佐太郎歌集



田宮 朋子選 「その二集」特選

春の買物 浜野昌子 北海道

稍よりヒヨドリの声聞こえて春の兆せり澄丘神社  
雪残る庭の楓の枝先に止まるヒヨドリ鳴く声高し  
石楠花の冬囲ひ解き見つけたり枝葉の陰に固き花芽を  
鶯色のエコバッグより青ねぎの頭はみ出す春の買物  
五年ぶり東京までの空の旅スーツケースに希望詰め込む

背をかがめたわしでシンクを磨く真夜せきたつるものなきわが時間  
庭木伐採生垣撤去 川越 三紀子\*宮崎

正解は判らぬままに始めたり庭木伐採生垣撤去  
六十年前は膝丈とつぶやいて伐採前に夫は出かける  
今し切る木にチェーンソーの触れる時見守らんとして我は目を閉す  
スクラムを組んでユニポに立ち向かう夫の実家の基礎のコンクリ  
三月の袴姿の眩しくて娘は吾より義母に似ている

そうしていつも 成田裕子\*青森

泣いても時間になれば立つキッチンそうしていつも救われている  
目を伏せても覆つてもいい眩しさのせいにしなよと夕陽のビーム  
フィナンシエとビスコッティを指で割り分ける幸せコーヒータイム  
春が来た春が来たよと風景がはしゃいでいるよドライブコース  
雪捨て場の雪は汚れて固まつてる汚れた涙も捨てていいかも

光の林 水鳥葉子 茨城

きさらぎの海より脱皮するごとく月しづくして空にのぼれり

ほくぼくと心さびしく鳴る夜は身の裡の池に釣り糸垂れる  
如月の光の林シユビルビル、シユビルビルと小人たちゆく  
たまきはるいのちたふとし鳥も木も魚もみづから死ぬことはなし  
かの人の手帳の裏に記された(メモメント・モリ)を想ふ月の夜

源 平 桃 渡 辺 繁\*千葉

いち面の枯れ野にどう群雀なにを啄む春まだ遠し  
蟻いでて天道虫や蜂がとびいよいよ春かきようは啓蟄  
川堤にけさ露のとう見つけたりそりそりと春は近づく  
南房の波の音きこゆ早春のサヨリ釣らんと通いし海よ  
紅白の源平桃は花盛りはるばる偲ぶ義経、敦盛

梅雨のヒカリエ 松下 誠 一\*東京

野良猫の尿のにおいの立ちのぼる茂みにフリスビーが迷い込む  
二十年生きた地元じゃどう散歩しようと知った道にぶつかる  
買い物をしてれば君に似合うものばかり目につく梅雨のヒカリエ  
赤ワインみたいな夜の荒川を僕だけが立ち止まって見てる  
朝礼に遅刻してきた五年生くらいはしゃいでいる池の鯉

大松 達知選

小さく開ける 梅 沢 佳 子\*静岡

眼の見えぬ老犬に餌を差し出せば歯の無き口を小さく開ける  
露の臺とんとん刻んで露味噌を作れば厨は春匂い立つ

フィラリアの葉を忘れないように毎月一日ハートのマーク  
今月の勤めを一つ成し終えて墓地去る時に風吹きぬける  
眼の見えぬ犬はあかるむ窓の外を修行僧のごと動かず眺む

牧水の海 森崎 洋 子\*静岡

降りつもる松葉を踏みて裏木戸を抜ければ光る牧水の海  
深々と松葉つもれる林抜けて牧水の見し海に立ちたり  
足沈むほどに松葉は降りつもりアロマ香れる千本松原  
ヒナ鳥を両手に包む形してやさしく咲けり白木蓮は  
人気ない陸橋から見えるんだ根雪残れる南アルプス

一緒にお風呂 岩 館 澄 江\*愛知

住んだことないはずなのにこの町は「帰ってきた」と思える場所だ  
木洩れ陽に光るカップのまぶしさに目瞑りながらコーヒを飲む  
しゃべりたいわけではなくて会いたいの足りないんですビデオ通話じゃ  
マスクとる瞬間妙に照れますね一緒にお風呂入るみたいで  
またきつと会えますようにとプレゼント それは呪いのようなものです

食えるし飲める 大塚 浩\*愛知

電気代気になる時節真向いの二階の部屋は朝まで灯る  
ピストルの位置確かめるガンマンか吾はテレビのリモコン探る  
歩けるし食えるし飲める八十五誕生祝い日本晴れぞよ  
黙したる少年二人スケボースコンクリートも割れよとばかり  
午前二時赤信号で止まりたるトラックの君にいうことはない

もうそれつきり

小田 沙也加\*愛知

知っていたはずなのにもう分からない違い 梅の花、桃の花  
信号に引つかからない平日は点字ブロック鮮やかに見え  
ヨーグルトひたすら混ぜる 連絡は途絶えてしまえばもうそれつきり  
帰らない地元置き去りのままのかつての私の一人称たち  
丸まった背中そのままでは咳が出て隣家のキッチンには歌う声  
水上 比呂美選

卯年の男の子

新 敦子 鳥取

ウラジロやみかんののぞくしめ縄に火入れの刻まつ卯年の男の子  
火入れ待つとんど開始の五秒前男の子目を閉ちふうつと息はく  
8の字の形残れるしめ縄の灰を掬ひぬこぼさぬやうに  
生乳よあはれ日に二トソ湯気をたて排水溝にうねる生乳  
搾つても売れぬ生乳棄てる夕べあしたも来てねと乳牛は啼く

稼ぎかしら

岡崎 清和 香川

君の口突然夜に動き出し日頃のうつぶん僕に吐き出す  
寒空に外に出すのはあたりまへ悪き鬼ども住まひはロシア  
マスクして暮す三年長かりき君の口紅何色だつたらう  
常日ごろたをやかなれるわが妻はゆいいつ我が家の稼ぎかしらなり

ちからなく栄養剤のふた開けられぬ窓の外には春がきてるのに

誰かに似てる

牧野 雅子\*佐賀

金言と自分で描きし絵をラインしてくるいとこ八十八歳  
子報士の開花予想の始まりて日本列島まもなくピンク  
姪からの法要の知らせ届ききて「気をつけてね」の一言ひびく  
ひな人形それぞれの顔に違いありどれも可愛く誰かに似てる  
「転ばない」自分で注意しながらも今年に入って三度躓く

なんやねん

原 万紀 長崎

歌詠むを生きゆく吾のささへとし夜のしじまに推敲してをり  
女童の風船に息を吹き足して蒼き弥生の空に放てり  
春耕の鋤打つ先になんやねん土まみれなる蛙とび出す  
麻酔打たれ意識はそこで消え失せぬ死ぬといふことあんな感じかも  
二ヶ月を留守せし庭に輝ける新緑のもとバラ咲きてをり

斑点模様

升金 曉美\*鹿児島

三月の雨降りつづく錦江湾もやの中より連絡船現わる  
マイアミでサムライジャパン奮闘し点差開くもどたんばで勝利す  
霧もやに影絵のような桜島錦江湾に浮き上がりおり  
霧雨の錦江湾に釣人は終日海に向かいて過ごす  
桜島の上なる雲が影おとし斑点模様が島に現わる